

思想問題としての「日本学」

張 彦麗

(北京日本学研究センター準教授)

はじめに

「日本学」といえば、おそらくすぐ想起されたのは JAPANOLOGY や JAPANESE STUDIES のような訳語であろう。いわゆる日本人ではない、外国人がやっている日本研究というイメージが強いと同時に、地域研究の色彩も重いであろう。そうしたイメージは必ずしも間違いではない。しかし、「日本学」という漢字の言葉はそれよりもっと歴史的な深みがあると思う。

一、「日本学」における二つの系譜——日本の場合

日本の歴史を振り返えてみると、「日本学」という言葉を通して「日本」を研究する意志を強く、しかも明らかに表明するのは二つの時期がある。一つは 1930-40 年代であり、もう一つは 1970-80 年代である。もちろん、同じ「日本学」という言葉を使っても、研究者の態度や研究の視角が全然違う。

(一) 国体学としての「日本学」

「日本学とは、皇国の国体を反省し、自覚し、以て国体を明徴ならしめると共に国体の本義に則り、時代の進運に顧み、皇国の進むべき道を究むるを目的とする学である。」(大関将一 『日本学』)

「更に今日、日本が一大飛躍をなさんとするに当たっては、八紘一宇の皇謨に基づき、東亜の新秩序を建設せんことを企図し、一億同胞は国体に帰一し、斉しく大政翼賛の臣道を完うせんことを誓っている。即ち我が国においては、将来の発展にも常に国体がその進むべき道の大綱を示すのである。日本学は先ず国体を充分に研究せねばならぬ。」(同上)

「神皇正統記は国体そのものを主題として、これを明徴ならしめた最も組織的な書物である。これまでの古典や国史類は国体の自覚、反省を含んでいるが、国体そのものを論題としては居られない。神皇正統記が始めて国体そのものを論題として、しかも或る意味に於いては最も組織的だったのである。この故に国体学又は日本学の学説史の初頭に神皇正統記を挙げたいと思うのである。」

(同上)

「大日本史」を著して皇統を正閏し、人臣を是非し、以て大義名分を明にし、

又大政奉還の志ありとまで言われた徳川光圀の遺緒を承けた水戸に於て、日本学が再び組織されるに至った。さうしてこれが国学に於ける国体学の確立と相俟って、国体の本義を明徴ならしめ、尊王倒幕の運動を指導し、以て王政復古、明治維新への途を拓いたのである。」(同上)

「会沢正志斎の新論は維新の志士に広く影響を与えたものであるが、その国体、長計の二論は、一は神聖忠孝を以て国を建てるを論じ、武を尚び民命を重んずるの説に及び、一は民を化し俗を成すの遠図を論じ、国体学として、日本学として、燦然と光芒を放つのである。」(同上)

明治以後、上杉慎吉と笈克彦

「然るに最近個人主義と自由思想との跳梁に委ねられた我が国に於ては、政治に、経済に、文化に、万民翼賛の實を挙げるには缺くところがあった。(中略) 文化に於ても、(中略) 大君にまつろふ日本人としての学問、芸術は忘れられていた。」(同上)

小野正康

(二) 世界学をふまえた「日本学」

「この日本学というのは、だいたい今まで日本の学問の伝統におきまして、国学といわれた学問とほぼ研究の対象を同一とすると考えていただいてさいつかえありません。ここで、わざわざ国学という名前を避けまして日本学というような名前を私がもちいましたのは、それは国学というのは皆さん御存じのように、江戸時代の契沖、真淵、宣長というような人たちによって創造された学問ですが、その学問はたいへんナショナリスティックな性格をもっている、それは偏狂なともいえる国粹主義というものをもっている。と同時に儒教、仏教に対する、はげしい敵意をもっているわけであります。私は、今後、日本についての学問を進めるにあたりまして、偏狂なナショナリズムであてはならない、同時に儒教や仏教に対する生の敵意というものをもっていてはいけないと思います。(中略) 国学者たちは儒教や仏教を排斥し、それをまともに研究しようとしませんが、私は儒教や仏教の研究、いってみれば、中国学やインド学の知識なしに、国学者たちが聖書とする『古事記』や『万葉集』でさえ真に理解できるか疑わしいと思うのであります。国学の偏狭な視野が学問の対象をも狭くしています。そういう国学にたいする批判の意味で、私はあえて日本学という名称を使っている次第であります。」(梅原 猛 『日本学の哲学的反省』講談社)

「日本学なるものは、一体何か。そしてそれは、なぜ今更、事新しく事始めしなくてはならないのか。はっきりいえば、私たちが、自分たちの学問を従来の日本についての学問から区別しようとする意志によってである。私たちから見ると、従来の日本についての学問は、あまりにも部分的であり、たとえば

それは、日本の歴史なら歴史、文学なら文学の、しかも、一時代のきわめて限られた現象にかんしては精密な研究をする。しかし、日本の文化を総合的、統合的に研究する学問はまだない。(中略) 従来の日本についての学問は、あまりに狭い専門的視野の上に立った学問であった。広い視野に立った、総合的、哲学的な、日本についての学問を新しく始めなければならない。これが「日本学事始」なる奇異なる言葉の意味であるが、同時に、そのような新しい日本学なるものは、古い国学と一線を画するのである。」(梅原 猛 『日本学事始』自序 集英社)

「国学は、日本古代を理想化したために、そこに存在する権力者たちの激的な政治的闘争にたいして全く眼をおおうと共に、もっとも外国との交流がはげしかった当時の文化に、外国思想の影響を認めようとしなかった、このような二重の狭隘な視野で見られた誤った古代像が、明治以後のあまりに部分的な日本学に、そのまま受け継がれている」(同上)

「私は、日本をただ中央ばかりではなく、広く日本全体を、特に日本の辺境との関係で考えなくてはならない(中略) 新しい日本学なるものは、ただ、イデオロギー的に国学を批判するのみではなく、国学の達成したもっとも高い学問的成果である日本語と日本文化の研究を、より高い学問的立場において止揚しなくてはならない。」(同上)

「日本で古典学といえば古い時代には儒教はかかせませんが、どちらかというと仏教が中心です。江戸時代になるとやはり儒教でしょうかね。明治以後になると、西洋古典のほうが中心みたいになってくる。ところが、日本学という焦点を合わせると、この三つが絡んでこなくちゃどうにもならない。しかもそれぞれの古典文化を見ると、ギリシャ、ローマの古典学(フィロソフィア)にはキリスト教がペアとして絡んでくるし、インドの古典学(ヴェーダ学)には仏教が、中国の古典学(儒教)には道教がペアとして絡んでくる。全部でレパートリーが六つになるわけで、これがよじれあって日本の中に入ってくるんですね。このよじれあいには、古事記、日本書紀のなかにも当然あるんです。したがって、日本に焦点をあわせると、日本学——日本の古典学は、相互によじれあった思想の絡まりあいとしてつかまえる世界学にならざるをえない。中国でもインドでも、自国の伝統を一本の柱としてやれるんですが、日本の場合には世界の古典学を解明していかないとわからない。幸か不幸か、学問的な必然性として、そういうものを押しつけられるわけです。」(同上 上山春平・梅原猛対談)

二、中国における日本研究の展開

中国における日本研究の歴史が非常に長く、『山海経』や『三国志』の時代に遡ることもできるとよくいわれている。しかし、日本を本当の「学」の対象として真剣に勉強しなければならないという気風がわいてくるのはやはり 19

世紀の末ごろを待たなければならない。

(一) 中国人の日本観の変遷

「中国人の日本観及び日本研究は、時代によって様相を異にし、時には排日・抗日の空気が熾烈を極め、時には親日的傾向が濃厚であったこともあったが、その異った観察・研究のなかにも、自ら一貫したものがあって、それは現代及び将来の中国人の対日思想を考察する上に重要なものであると考えられる。今中国人の日本観・日本研究の推移を時代によって区分すれば、大体次の如くにするを得よう。(1) 古代から、十三世紀頃まで(2) 十三世紀頃から、一八六六年頃まで(3) 一八六七年頃から、一八九四、五年頃まで(4) 一八九六年頃から一九一一年頃まで(5) 一九一二年から一九四五年まで(6) 一九四五以後、現在(1948 年頃)に至るまで」(鈴木 俊「中国人の日本観の変遷」 中国研究所編 『中国の日本論』 潮流社)

「第一期は、古代から大体唐・宋の頃まで、この時代の中国人の日本研究・日本観は主として正史によってうかがわれる。(中略) 中国人は日本を東夷の一小国であり、変った珍しいところと考え、当時の他の国々以上に、日本について特別の関心を有していた訳ではない。」(同上)

「第二期は、元の時代頃から清朝の末期、即ち明治維新に至るまで、この時期の正史として、「元史」や「明史」の日本伝があるが、この時代の著しい特徴としては、正史以外に、日本のことを記したものが多く現れていることである。しかしてこの時期に至っても、中国人は依然日本を東夷の一小国と考えていたのに加えて、唐宋時代の中国人の日本観が割合に好意的であったのに対し、頗る悪感を抱くに至っている。これはいうまでもなく、元寇の事件による日元関係の悪化に加えて、明代に猖獗を極めた倭寇、さらに起こった秀吉の朝鮮の役によるものである。(中略) 倭寇防禦の一助として、明末には中国人の日本研究書が多数現れるに至った。(中略) 清代になると、江戸幕府の政策によって日華の交通薄れ、明末にかく盛であった中国人の日本研究は全く衰え、彼等の日本に関する知識は、明治維新に至るまで、さしたる進歩を見るに至らなかった。(中略) 第二期においては、中国人は第一期におけると同じく、依然日本を東夷の一小国と考えていたが、倭寇などの事件によって日本に注意し、日本のことを相当深く知るようになり、それと共に、日本人を好戦的な、剽悍武強な侵略民族と考え、かかる中国人の日本観は現在にまで及んでいるのである。」(同上)

「第三期は、明治維新から日清戦争の頃までで、この時期において注意すべきは中国識者の間に攻日論が盛行したことである。(中略) このような中国人の反感は単に日本が中国文化圏から離脱したというだけでなく、東夷の一小国に過ぎない日本が、台湾事件・琉球問題などによって生意気にも中国と事を構えるに加えて、中国が宗主権を主張する朝鮮において、江華島事件・壬午の変・甲午の変などが起こり、日華の間に暗雲が低迷していたがために外ならない。」

(同上)

「第四期は、日清戦争以後、明治の末年までで、(中略) 中国人は日本の実力、文化の進歩を認め、ここに彼等の日本模倣が盛となった(中略) 中国がその文化的従属国と考えていた日本から、今や逆にその学術・文化を輸入するに至ったことは、実に東亜史上の一大変革というべきであるが、ここに考えるべきは、日本の学術・文化に対する中国人の考えである。(中略) 中国人が日本の学術・文化の価値を実際に認めてそれが輸入につとめたのではなく、欧米の学術・文化を輸入する手段として日本のそれを輸入したのである」(同上)

「第五期は中華民国の成立以後、即ち大正元年頃から、昭和二十年の終戦までである。(中略) 第五期になると、中国においては排日・抗日の空気が日一日と激化するに至ったのである。」(同上)

「第六期は終戦以後、現在に至るまでで、この時期について、私はまだ何等述べるべき資料を有していない。」

「そこに一貫したものとして認められるものは、中国人は古来日本に対して中華思想を以て臨み、日本人を剽悍武強な好戦民族と考え、また日本の学術・文化を欧米のその移植したものであり、その点において日本の学術・文化を尊重していることである。」

(二)「異様」な日本研究——戴季陶・周作人・陶晶孫

「以前、私が日本で勉強していたところ、同学の友人が何人もいたが、かれらはみな日本語や日本文の研究をきらった。なぜきらうのか、理由をたずねると、答えは二つあった。一つは、英語なら帰国してから役に立つが、日本語や日本文は役に立たない、というのである。もう一つは、日本そのものには研究価値がない、なぜなら、中国やインドやヨーロッパから輸入したもの以外になにもないからだ、というのである。この二つの理由は、前者は「実利主義」、後者は「自大思想」の弊に陥っている、と私は思う。(中略) 私は、今後、中国人はもっと真剣に日本研究に関心を向けるべきだと思う。日本人の性格はどうなのか。思想はどうなのか。風俗習慣はどうなのか。国家および社会の基礎がどこにあるのか。生活の根拠はどこにあるのか。これらすべての点にわたって、真剣に研究しななければならない。(中略) 学問からいっても、思想からいっても、また種族からいっても、日本という民族は、極東において、中国を除けば、最大の民族なのだ。その歴史は、中国、インド、ペルシア、マライから朝鮮、満州、モンゴルにまで関係が及んでいる。しかも、ここに三百年あまりの期間において、世界文化史に占める日本の地位はきわめて重要である。であるから、単に学問の領域だけにかぎっても、いろんな角度で専門研究をやる価値と必要があるわけだ。」(戴季陶著 市川広訳・竹内好解説 『日本論』 社会思想社)

「もともと一民族の代表としては二種類のものが考えられると思うのです。政治軍事方面のいわゆる英雄がその一、芸文学術方面の賢哲がその二で、両者

ともがらんらい人生における各一面でありながら、ただ目指すところが異なるばかりに、しばしば背馳するに至る。したがって、これを区別して扱うことはできても、安易に一方に依拠して他方を抹殺するわけにはゆかない。たとえば、日本文明を愛するの余り、何もかも素晴らしいと思ひ込み、その醜悪面につむるのも、また暴力を憎むからといって逆にすべてを打倒してしまい、日本に文化無しと決めつけるのも、同じような誤りです。」(周作人著 「日本文化を語る手紙(その二)」 周作人著・木山英雄編訳 『日本談義集』 平凡社)

「日本人は何でも本気でやる、月謝をはらってバレエを習う、頑張る、りきむ、負けず嫌いだ、だから科学も文化も芸術も進んだ……ただ日本人は自分でも気がついて、多くの人が書いているように、イミテーションをやる。しかし、私はすこしもイミテーションを攻撃しはしない、新城又城先生が中国の書画を愛する、先生は真贋を問わず、自分が好いと思ひ、財布と相談ができたならそれを買って眺めている、先生にとっては楽しみであって文明批評や考証ではない、多くの日本人はしかし専門家のように真物について見栄坊である、私はこの日本近代イミテーションの中に住むことを楽しいと思う、これは皮肉ではない、イミテーションは本物を思い起こさせる。非常に豊富感がある。」(陶晶孫 「日本に住む楽しさ」)

結びにかえて——中国の日本学

「日本人と中国人とは、かつてほんとうに理解しあつたことがないといえる。それを私ははなはだ奇怪なことだと考える。これは双方がそれぞれ固執している優越感の祟りかもしれない。一般の日本人は、いかに表面上は顔を和らげ、にこやかにしていようと、心の底では、みな、いくらか中国人を軽蔑している。中国人は文明において、非常に立ち遅れていると、かれらが考えているからである。他方において、一般の中国人も日本人を軽蔑する。日本は文化においては、中国の末裔だと思っているからである。すなわち日本人は後から来ながら兄貴分だと威張れば、中国人は、昔の先進国だといって誇るのである。それゆえ、双方の気持ちの上は、堅い壁とふかい溝ができて、理解しあう術がなくなつたのである。この点について、私は今後双方がまずこの固執せる優越感を取り去って、たがいに相手の善いところ、優れたところのなかから、尊敬し賞讃すべきものを見出してほしいとおもう。」(施蛰存 「日本と中国」 『中国の日本論』 潮流社)

「現代化の本当の目的は充分に発展する人間を育成することであり、本当に人間の価値と尊厳を実現する人間を育成することである。私たちの研究は日本人民及びそれ以外の国々の人民の長所を発見して、と同時に中国人民の長所を発揮して、世界中にこのような人間の形成に役立つべきである。」(李慎之 『日本問題』)